仕事と子育て、どちらも大事。その両立に悩む

「三時半（保育園に子供を迎えに行く時間）に合わせて仕事をしている母親は結構いると思いますよ」。大通保育園に子供を預ける谷かず子さん（大通南三）。子育てをしながら働くお母さんだ。「私自身、どうしても午後は子供の迎えが気になります。十分な時間がなければ、ちょこちょことしか仕事ができない。本格的にできなくなってしまうんです」。

仕事と子育ての両立は確かに難しい。おじいちゃん、おばあちゃんがいる家庭はまだいい。二十代そこそこで、二人っきりで小さな子供を抱えている若い夫婦も、市内にはたくさんいる。

核家族化が進む大通地区では、新潟市内の私立保育園に子供を預けて働いている人も多い。勤務が終わってすぐ子供を迎えに行けることはもちろんだが、保育時間が長いこと、乳児の受け入れ体制が整っていることなどがその主な理由だ。

そんな大通地区で、丸山美由紀さん（大通南三）は私立保育園の誘致推進委員会の副代表を務めている。私立保育園がない白根市で、先駆的に活動を始めた形だ。

丸山さんは言う。「遠くに勤めている人は送り迎えが本当に大変なんです。未満児や乳児を見てもらいたい人もいます。社会に出れば、産前産後休暇、育児休暇をもらえる職場は少ない。『何も生まれてすぐ預けなくても』という声も聞きますが、家庭の事情、経済的なものもあります。そしてやっぱり生きがいとしての仕事がしたい。私も子供が大きくなればそうしたい」。

働く女性の先頭に立って、丸山さんは活動を続けている。

働く母親たちのために、市でも保育時間・内容の拡大を続けてきた。現在、白根市立の保育園で延長保育をしている所は十六園のうち五園。延長時間は朝七時三十分からと、夜は六時半まで。未満児（二歳以下）保育は十園、乳児（一歳未満）保育は一園で実施している。多様な保育を求める声は、これからもますます増えていくことだろう。

ある保育園の園長は、白根市の現状を『小さな国際化』と表現する。

「いろんな家庭の事情があって、転入者も増え、さまざまな考えを持った人が出てきて…。白根もそういう状態に入ったんですよね。いろいろ悩んでいる母親も多いと思う。困っていること、してほしいこと、分からないことがあれば、遠慮なく保育園へ相談してください。できる限り力になりたいと思っています」と言う。

▶私立保育園の誘置を求めて運動する丸山美由紀さん

▶私立保育園の誘置を求めて、10月28日、大通地区で集会が開かれた

子育てを振り返る。子供と一緒にいる時間はやっぱり大切

保育時間の拡大について母親の声を聞いた。「延長保育は必要」という声が大勢を占めたが、「できれば子供と一緒にいたい」という意見も多かった。

古川保育園で母の会代表を務める中西公子さん（古川団地）。今年、一番下の子が保育園を卒園する。「最初の子のときは、三時半は早いかなと思っていたんですよ。お迎えの人を頼んだりしてましたし。『延長保育があればなあ』って考えたことあります。でも、今になって考えれば、子供と一緒にいる時間というのは大切なんだと思いますね」と中西さんは言う。

白蓮保育園に子供を預ける美濃利木香さん（戸石新田）も、二人目の子が卒園する時期を迎えた。「子供を預けている間仕事ができると思えば、プロにお任せしていた方が楽。でも自分の子は自分の目で見ていたいという気持ちもあります。私自身、忙しくて『あっ、子供に背を向けているかな』と気付くときもある。もし保育時間が長ければ、ついそうなってしまうかもしれません」。そう言って、自らの子育てを振り返る。

いくら仕事があるとはいえ、人任せにはしたくない。自らの手で子供を育て、見守ってやりたいのが母親の心情だ。

▲市内各地で新興住宅地が増える。核家族化が進む

地域ぐるみで子供たちの面倒を見ていこう

仕事と子育ての狭間で悩む母親が多い今、地域で助け合って子供を育てていこうという動きも見られる。

「地域ぐるみでの子育てを」という狙いで、織田絹子さん（大通南一）が地域の母親たちと「わくわく大通っ子クラブ」を作ったのは一昨年のことだった。設立のきっかけを織田さんは語る。

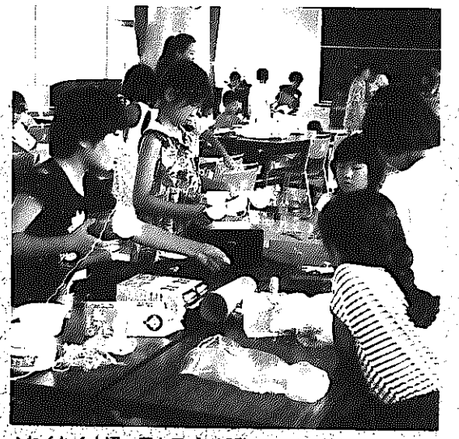
「風の強い日、昼間なのにとぼとぼ歩いて帰る子に会った。『どうしたの？』って聞いたら熱があって帰るらしい。車で送ってあげたんですけど、途中で泣き出して。さみしかったんでしょう。見掛けた人がちょっと声を掛けてあげれば、それだけで子供は勇気づけられるのに。そういう意味で新興住宅地は、他の地区と比べてつながりが薄いとも言える。地域の中で、親と子が一緒になって何かすることが必要だと思ったんです」。

織田さんの考えは口コミで伝わる。春休みを利用して最初の行事がスタート。八十人の子供たちが、公民館にお米一合を持って集合し、おにぎり作りに挑戦した。準備と指導はボランティアの主婦スタッフが当たった。

「子供たちは手をべたべたにして、おにぎりを握った。形も悪くて塩を付けただけ。それを本当においしそうに食べる。たくあんなんかも『そっちが厚いぞ』って奪い合って。飽食の時代という今、そんな姿を見ながら、ああ、これなんだって。地域みんなで遊ぶのは大切なんだって」。

織田さんの予想をはるかに超えて、クラブは大盛況となる。夏休みの自由学習会には、学年の枠を超え百四十人もの児童が参加。お母さんスタッフもぐんと増えた。

「働く女性も増えてカギっ子は多い。でも今はみんなで集まる場がなくてふ



▲わくわく大通っ子クラブの活動